

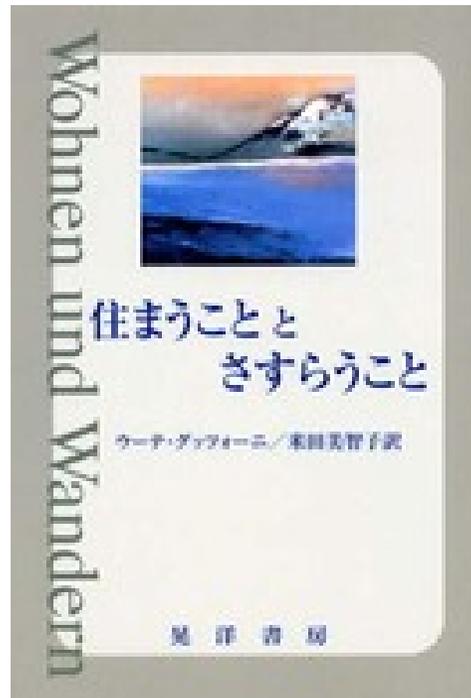


旅と写真

みずしま ひさみつ

東海大学 2020.02.22

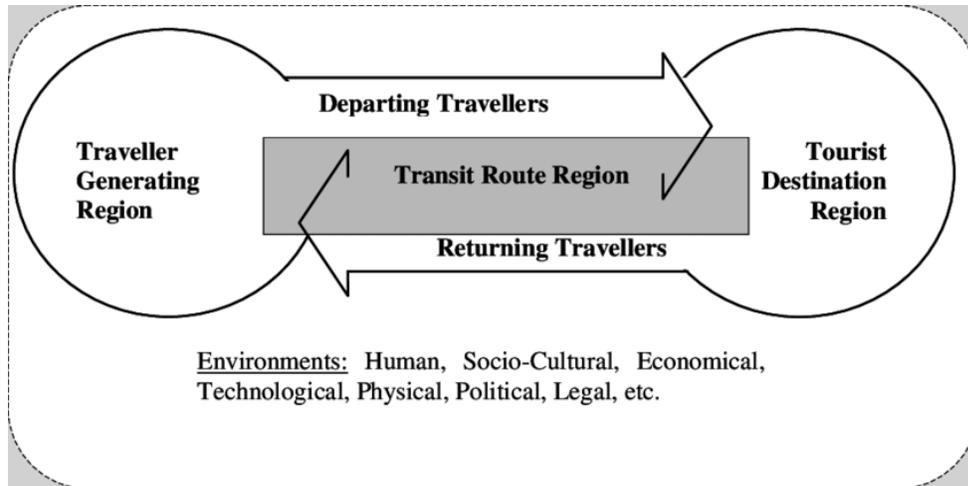
「旅」とは何であろうか



ウーテ・グッツォーニ『住まうこととさすらうこと』米田美智子訳、晃洋書房、1999＝2002

「私たちが住んでいる世界は、分かち合われた世界である。それはたんに関与する (Teilhabe) という意味においてだけでなく、分け前を＜受け取る＞ (Teilnahme) という意味での分かち合われた世界である。この世界を構成するさまざまな連関や軌道、関係や指示、結びつきや編み合わせは、この世界の住人が張り入れるだけの連関ではない。

「旅」とは何であろうか



Leiper, 1979. 1990

basic tourism systemとして「観光」を定義

観光需要の発生地, 観光客, 交通機関,
観光目的地, 外的な社会環境

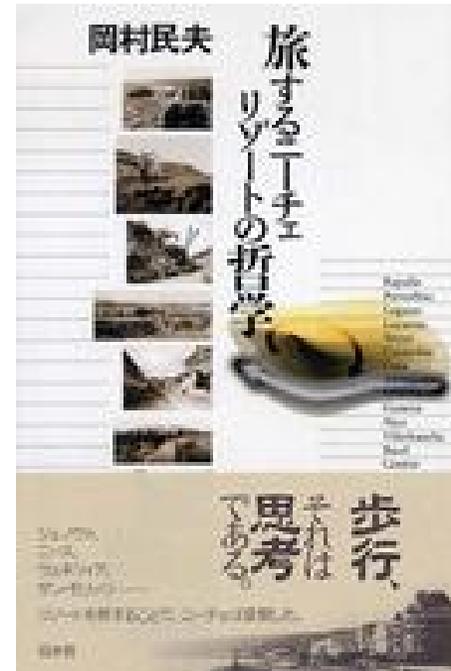
移動による環境の変化

Leiper, Nell (1979), "The framework of tourism: Towards a definition of tourism, tourist, and the tourist industry," *Annals of Tourism Research*, vol.6(4), p.390-407

「旅」とは何であろうか

内容詳細

歩行、それは思考である。ジェノヴァ、ニースなど、ニーチェが旅行者として生き、もっとも多産に著作した10年間。舞踏のようなアフリズム・スタイルを生んだ「移動し歩行する思想」のノマディズムを解明する。



旅と「写真」について

環境＝風景

仮に、「風景」はア priori にそこにあるものではないという命題が正しいものとして、それを反転させるならば、「風景」は同時に、痕跡を残さずに消えきってしまえるものでもないということも言える。とするならば、そこに存在し認識しうる様々なことがらが、「風景を成す瞬間」というものが想定できるのであり、そこでは風景から零れ落ちるものも、同時に生まれるはずである。「風景の喪失」を、単純に津波のような物理的破壊によるものではなく、signification(意味作用)のレベルで起こっていることと考えるのならば、風景に組み込まれるものとそうでないものの振る舞いを、構成素単位で見ていく必要があるだろう。(水島久光「テレビ番組における風景の位相～映像アーカイブと日常の亡失に関する一考察」2012)

←

【Ⅰ】個人における展開

【Ⅱ】個人から集団への展開

【Ⅲ】集団から個人への展開←

(1) 基本風景

(2) 原風景

(3) 表現的風景←

←

木岡伸夫『風景の論理—沈黙から語りへ』2007



旅と「写真」について

「写真」というシステム

「かつて、そこに街があった」記憶は、極めてランダムなかたちで人々の心の中に存在している。「写真」は、そこに「秩序」を与えていく契機となる。それは一つのコンテンツの中に時間を内包する「動画映像」との大きな違いである。各々が切り取られた断片でしかないからこそ、想像欲(イマジネール)を強く喚起するのだ。それはたとえ一枚であっても、我々はそこに奥行きを読み、背後に回り込もうとする。ロラン・バルトが発見した「プンクトゥム」(主観に鋭く訴えかけ、細部を発見しようとする経験を喚起する力;『明るい部屋』)の概念とは、まさにこのことである。それがもし、束になって存在をしたら.....。

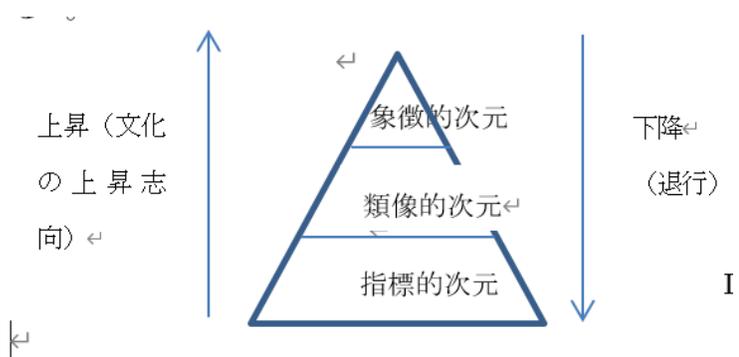
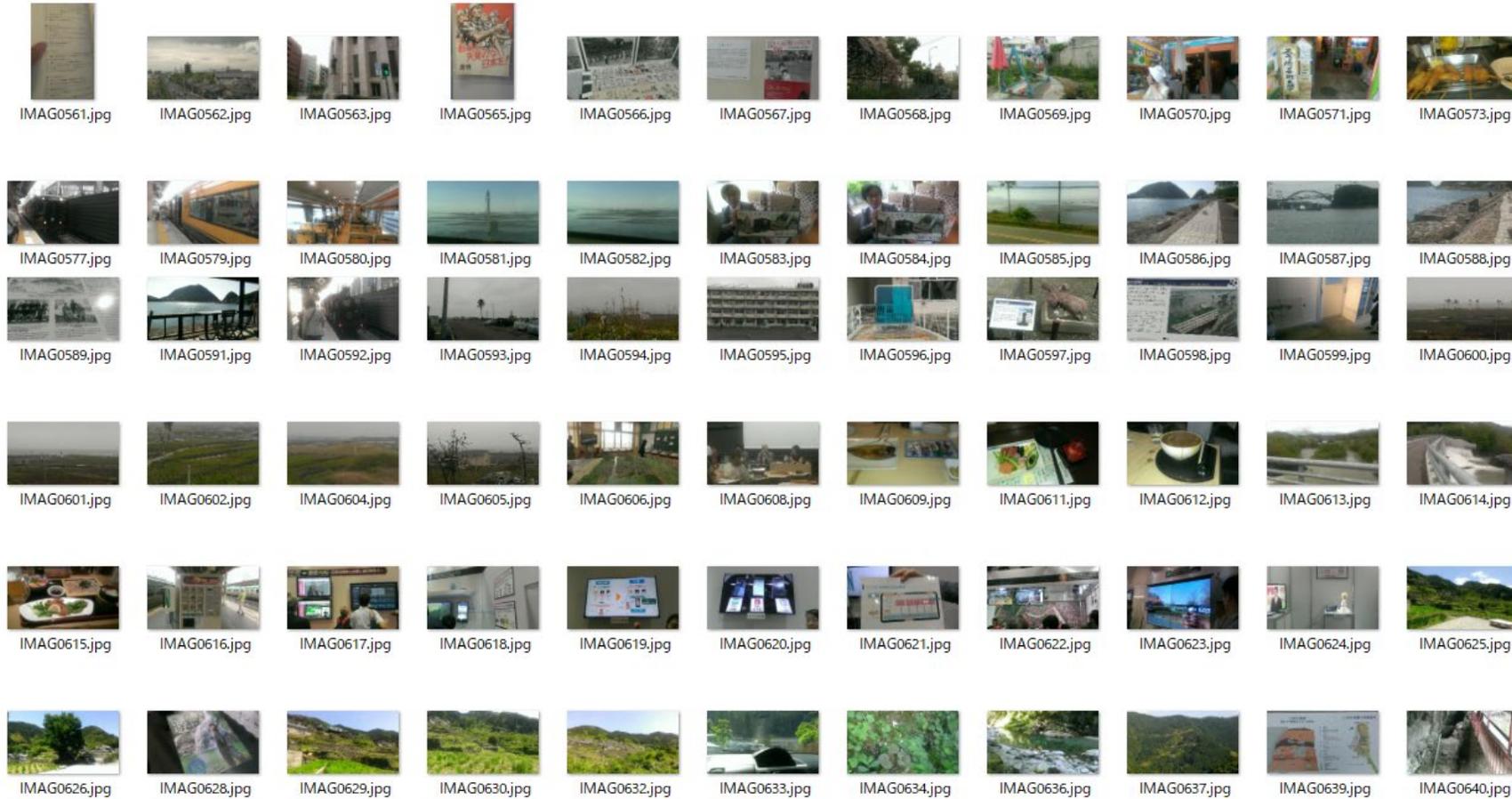
さらにヴァルター・ベンヤミンが『写真小史』で訴えた「知覚の新たな機能」を重ねると、「写真アーカイブ」の可能性がさらにはっきり見えてくる。彼は1910年前後に活躍した写真家——肖像写真一辺倒だったそれまでの「写真界」に対し、数多くの風景写真を発表し、衝撃を与えたウージェーヌ・アジェの作品群をとりあげ、そこに(有名なフレーズ)「アウラの消失」を見る。それは「集団によって作られる」非個人的知覚の出現である。「アジェに至って写真は、歴史過程の証拠物件となりはじめていく」(『写真小史』)。しかし、それはかつての文書館としてのアーカイブが奉じた大文字の「歴史」ではない。それは「生活状況全体の文書化」(『写真小史』)の可能性を拓く。

一定のボリュームをもった写真群に、人々が「集団」で向き合ったときに何が起こるのか。ここから我々は、ボトムアップでメタデータづけを行う可能性を考えることができる。人々が「ここではない」「いまはない」場所に、パラレル・ワールドのようにイメージを携えて向き合うことができるとしたら、そこでは言うまでもなく、リアルな時空間を相対化して、批判的に「地域＝人間の集合性」を捉える「眼」が開かれるに違いない。

多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波現代文庫、2000、「アウラの消える日」p.45-62



僕と「旅」



「基本風景」「原風景」「表現的風景」の三契機が、
 <上昇><下降>の相反する過程を同時に生成させることへの着眼は、「記号のピラミッド」が未分化な一次過程的な指標の世界と分節された二次過程的な象徴の世界を往還する「意味の動態」を記述するモデルである点に呼応する。
 D.ブーニュー『コミュニケーション学講義—メディアロジーから情報社会へ』水島久光監訳、西兼志訳、書籍工房早山、p.60(図も)。一次過程、二次過程といった精神分析の概念と記号のピラミッドとの関係については、同書、p.75参照

学前ローカルイメージラボの構想

記憶と記録を媒介にして、
地域同士がその歴史と課題を共有し
新たな「社会づくり」の
豊かな「イメージ」を築いていく

学前夕暮れ映像祭の開催

地域連携アーカイブ
研究会の実施

地域映像アーカイブに関する
データベース構築



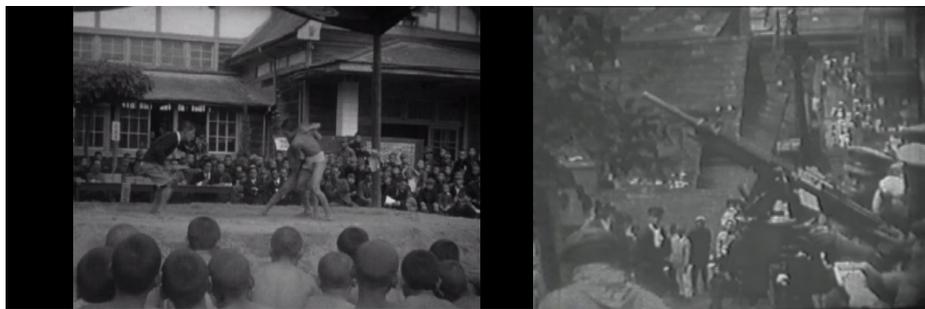
主題: その地域において大切な記憶——産業・生活・開発・災害・戦争といった視点



素材: 地域に残された・収集された、あるいはナショナル・アーカイブの中に発見される「地域」イメージ群の把握



手法: 素材をトリガーに記憶をよみがえらせ⇒共有し⇒「資産」にしていくための手続きの開発



須賀川町立第一小学校映像
(16mm,1934)

夕張町防空演習(9.5mm,1934)



東日本震災1000日プロジェクト
(2011-2019)



大夕張写真展(2006)



『レンズが見たひらつか』よりS30
年代(2012発行)



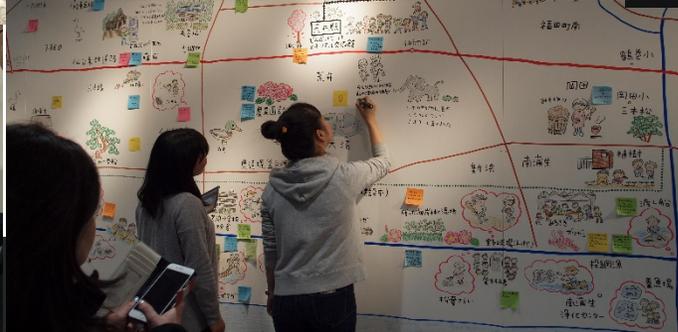
展示・上映



聞き取り・定点観測



ワークショップ



主題ケーススタディー： 「戦争と住民」＝「小型映画」×「アーカイブ・ツーリズム」

小樽 戦時下の生活が映された9.5mm、16mm



陸前高田 戦時下の生活／被爆・空襲に関する聞き取り

広島 現地の確認（定点観測）



共同体と戦後復興



1フィート運動映像
@沖縄県公文書館



撮影・仲里政範@沖縄デジタルアーカイブ協議会